【平成23年５月　被災者支援部隊　女性警察官（37歳)】

「話を聞くことの大切さ」

私は４月18日から27日までの10日間、被災者支援部隊として、岩手県に派遣されました。

岩手県警では震災発生の５日後から被災者対策としてサポートチームを結成し、被害の大きかった釜石、大船渡、宮古の３地区に分かれて各避難所を訪問する活動をしており、秋田県派遣部隊10名は、その３地区に分かれてそれぞれのサポートチームの一員として、被災者からの相談、要望事項を直接聴取するという活動をしてきました。

私が担当したのは釜石市、大槌町の避難所でした。

この地区を管轄する釜石警察署は、警察官も殉職し、庁舎は津波の被害を受けて使用不能の状態ということで市の中心部にある交番を臨時警察署として、署長以下がそこで勤務し、被災状況の把握、相談業務、免許の再交付手続き等の対応をしていました。

「被災状況や避難者が置かれている立場がわからなければ、きちんと話を聞くことができない」ということで、サポートの活動に入る前に、まず街の被災状況を確認してから避難所に向かうことにしました。

テレビや新聞などでその状況は見ていましたが、実際に自分の目で見た被災地のあまりの酷さに、私は言葉が出ませんでした。

道路の両端には倒壊した家屋と、津波で押し流された車や物が山のように積み重なった状態で放置され、沿岸部では建物の土台と思われるコンクリートだけが残っており、海に設置された堤防は、ほとんどが津波で倒壊した状態でした。

津波のほかに火災の被害も大きかった大槌町では、地区一帯に燃え尽きた建物や車の残骸が広がっており、ほとんどの地域で瓦礫が撤去されていない状態で、行方不明者の捜索もあまり進んでいませんでした。

そんな光景を見たばかりだったので、最初は被災者の方々になんと声をかけていいのかわからず、特に被災時の事を思い出させないよう話すことにかなりの気を使いました。

実際に声をかけると、被災者の多くは「全国からの支援に対する感謝の言葉」や「津波発生時の避難所として決められていた場所や道路まで津波で流されてしまって驚いた」といった声がほとんどでした。

しかし、ゆっくりと話を聞いていくうちに、次第に自分の家族の事などを話しはじめました。「お父さんがまだ見つかってない」「子供も孫もみんな津波に流されて家も流されてしまって、この年でこの先どうやって生きて行けばいいのかわからない」「自分は胸まで水に浸かりながら足の不自由な夫と一緒になんとか逃げたが、その横を亡くなった方が大勢流されて行くのを見た」「津波で逃げる際、後から避難してくる人が、『助けてくれ』と言いながら次々と津波に飲み込まれて行くのを見て、夜になるとそれを思い出して眠れない」という、聞くだけでも辛い内容が多くありました。

また、ある避難所では、物資の補給はあるものの、自治体職員もほとんど訪問しておら

ず、話を聞き始めた途端に、避難してからの大変な生活の事を泣きながら話し始める人もいました。結局、私は「そうだったんですね。大変な思いをしたんですね」という言葉しかかけることができませんでした。

それでも、話が終わるころには「それでも頑張らないとね」「どうもありがとう」という前向きな言葉を聞くことができました。

被災者の方々は辛いのは自分だけじゃないという思いから、被災者同士ではなかなか弱音を言えなかったため、それを私たちに話すことで少しは落ち着いてくれたのだと思います。話を聞くだけしかできないと思っていましたが、それはとても重要なことなのだと感じました。

今回の派遣では相手の立場を理解して、相手の気持ちを思いやって話を聞くことがいかに大切で難しいことかを学ぶことができました。

また、被災地を回っている際、余震が続く中でも、瓦礫の中から行方不明者を捜索する機動隊員、被災地をパトロールする警ら隊、交差点で交通誘導をする交通部隊と全国から集まった多くの仲間の姿を目にし、改めて警察の責務の重さと組織力を感じました。